

松本清張

長編本格推理

殺人行おくのほそ道【上】

KODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス



殺人行 おくのほそ道〔上〕

昭和五十七年五月二〇日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価五八〇円

著者―松本清張 © 1982 SEICHO MATSUMOTO Printed in Japan

発行者―三木章

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一―二 電話東京(〇三)―九四五―一一一(大代表)
振替東京八―三九三〇

印刷所―凸版印刷株式会社 製本所―大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

松本清張

長編本格推理

殺人行おくのほそ道【上】





松本清張(まつもと・せいちょう)

明治42年福岡生まれ。『或る「小倉日記」
云』により芥川賞受賞。『点と線』『砂の
器』など推理小説第一人者として活躍。

銀座で洋装店を経営する美しい叔母は、倉田麻佐子の自慢だった。ある時、麻佐子は、叔母が叔父の山林を、叔父に内緒で売った事を知り愕然とする。秘かにその謎を探る彼女は、その山林売買の仲介をした海野がタクシーにはねられて死んだ事を知る。叔母は何故お金に困っているのか。海野の死は……連続殺人事件の始まりだった。

人行おくのほそ道〔上〕

清張

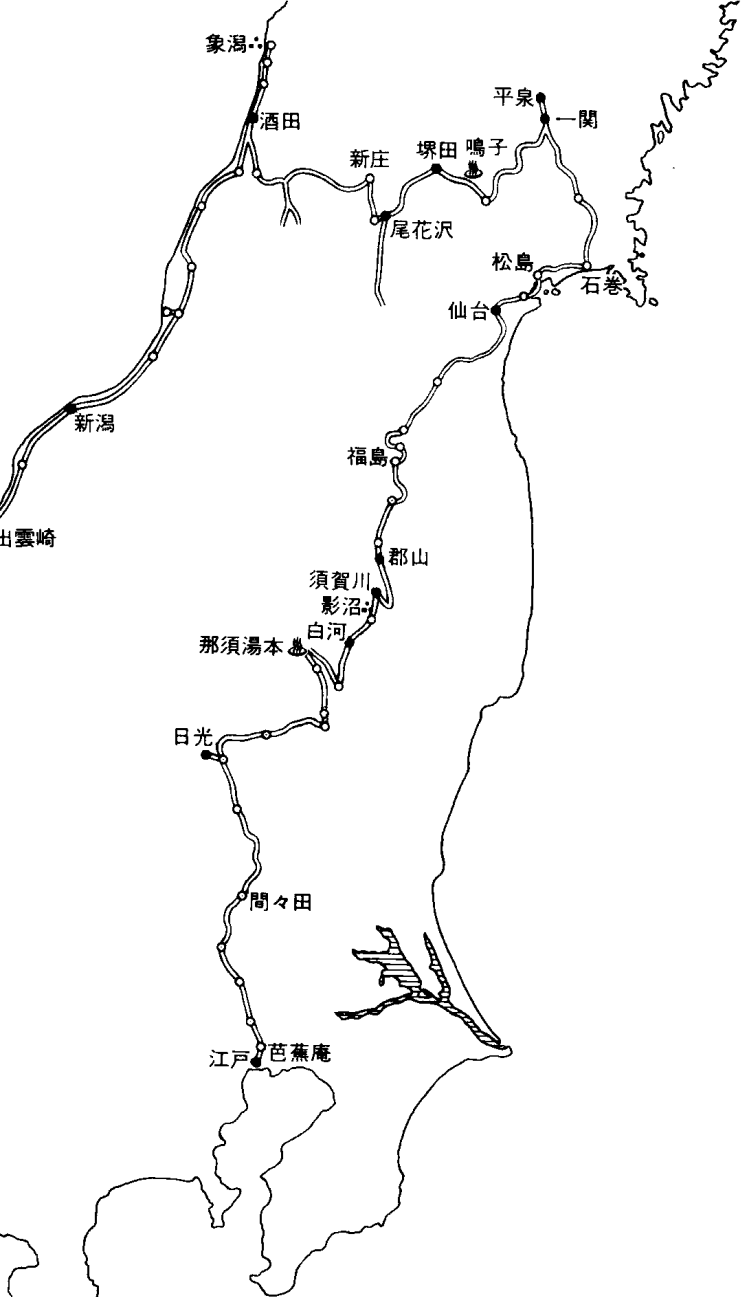
ODANSHA NOVELS

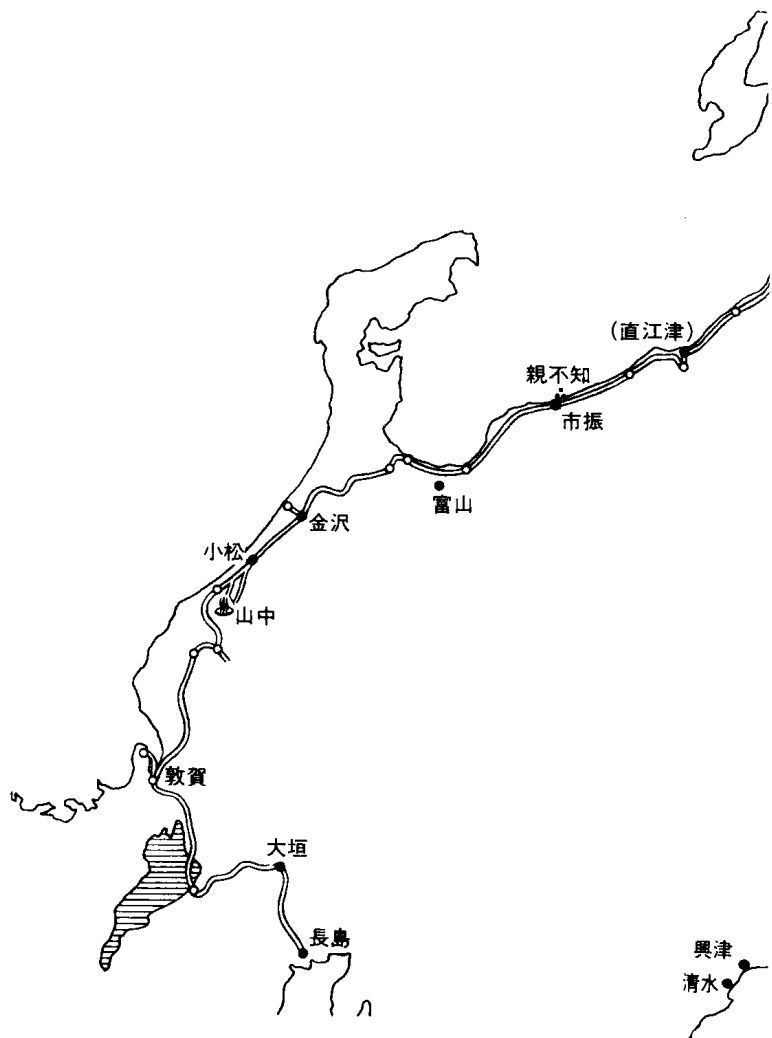
講談社
ノベルス

この小説は、昭和三十九年七月から昭和四十年八月まで雑誌「ヤングレディ」に連載した小説「風炎」である。終始『おくのほそ道』に関連しているので、今回、単行本にするにあたり、『殺人行 おくのほそ道』がいいと思うので、これに改題した。

—— 著者

殺人行 おくのほそ道――地図





ブックデザイン
カバーイラストレーション

市川英夫
伊藤憲治

倉田麻佐子に一つの記憶がある。――

彼女がまだ大学の二年生だったから、今から五年前に当る。叔父の芦名信雄といっしょに仙台から山形を回ったことがあった。あれは懐しい旅だった。

「麻佐子」

渋谷の家に遊びに行ったとき叔父は云った。

「来月は飛び石連休があるね」

五月の初めは暦の上でそうなっている。

「何か予定があるかい？」

信雄は癖の、すぼめるような眼つきをした。長身だが痩せていた。年齢より老けて見えるのも丈夫でない証拠である。

「別に決めてないけど」

そのゴールデン・ウィークは麻佐子も年の初めから楽しみにしていた。その年の五月は祭日と日曜とが一日おきにあり、これに土曜日が加わっている。

「もうとつくに決っているかと思った」

麻佐子は、前から、その連休をどう埋めようかと考えてないではなかった。むしろ思案に過ぎて、決らなかつたといえる。多勢の友だちと相談したのがいけなかつたのかもしれない。衆議まちまちで、結局、宙ぶらりんの恰好になっていた。

「決ってなかつたら、どうだ、叔父さんと久しぶりに旅に出かけてみるかい？」

「旅ですって？」

この叔父が旅行に出るなどとは考えてみたこともなかった。

「素敵だわ。でも、大丈夫なの？」

「何が」

「そんなお弱い身体で」

「こら、年寄を軽蔑するな。これでも君の歩けるぐらいのところは歩けるよ」

「まあ、うれしい。旅もだけれど、叔父さま、元気になられてうれしいわ」

信雄は日向の明るい縁側に坐って、庭の一方を眺めていた。植込みの竹には四月半ばの明るい陽が当り、葉の隙間から青い空がこぼれていた。眼は愉しそうであった。

「どこに参りますの？」

「芭蕉の『おくのほそ道』はどうだ？」

麻佐子は信雄の顔をみつめた。

「芭蕉ですか。叔父さまらしい趣味だけど……田舎歩きね」

「むろん、田舎さ。だが、五月の初めだというと、恰度、芭蕉が金色堂から奥羽山脈を越えて山形に出た頃だ」

「五月雨をあつめて早し最上川、ですか」

「昔の暦と今の暦とはもちろん違っている。季節的にはもう少し先になるだろうが、五月と呼ぶことには変りはない」

「平泉の中尊寺に行くんですか？」

麻佐子は眼を輝かした。

「むろん、松島を端折ってでも中尊寺の光堂ひかりどうを拝観せねばなるまい。そうだ、長い旅だとわたしも飽いてくる。いっそ平泉を起点にしたらどうだろうね」

「すてき」

麻佐子は両指を組み合わせた。

「叔母さまもごいっしょでしようね？」

「いや、あれは無理だろう。今度は麻佐子と二人で行きたい」

「叔母さま、ごいっしょ出来ないの？ つまらないわ」

麻佐子は叔母の降子が好きだった。叔父とは一回りだから十二歳違いの三十九だが、叔父が老けているのに比べ叔母は若く見えるからもっと年齢の開きがあるようであった。色が白くて上品な顔立ちで、殊に着物で立っている叔母をうしろから見るのが一ばん好ましい。小さいときは、この叔母を持っているのが麻佐子の自慢だった。ときたま友だちを呼んで、わざわざ叔母を見せたものである。友だちは麻佐子の期待にたがわず、まず口々に叔母を賞めた。

「麻佐子といっしょに短かい旅に出るのは何年ぶりかな。そうだ、あれは君が小学二年生の頃だったかな。ば

くが手を引いて汽車に乗せ、軽井沢まで行ったことがあったな」

麻佐子もそれはおぼえている。その夏休みに叔父の別荘に行った。それは旅というのではなく、その別荘で待っている叔母を訪ねたのである。あのときは向うに叔母がいたから楽しかった。

「叔母さま、どうしてごいっしょ出来ないの？」

「彼女は忙しいからね」

叔父の口吻は、気のせいか少し寂しそうだった。

隆子は都心に洋裁店を経営していた。かなり大きく、デザインが三人いて、縫子さんも十五人ぐらいいた。

叔母の隆子には、そういう経営の才があった。デザインのほうは最初自分でやっていたが、あとは腕のいいデザイナーを招き、これがうまく当った。個人経営だが、一応、会社組織にしている。叔父が社長で、叔母は専務だった。

隆子は上野駅まで、叔父と麻佐子とを見送ってくれた。おそい夜行列車なので、一晚、車中に睡るのだ。叔母は、サンドウィッチだの、チョコレートだの、ジュー

スだのを洒落た籠にいっぱい詰めて持ってきた。

「麻佐子さん、叔父さまの看護婦さんになったつもりで行ってね」

窓の外の笑顔もきれいなのである。事実、その近くで見送っている人たちが隆子の姿を見返っていた。春の終りから初夏にかけての女の服装は一変する。隆子は白っぽい着物に、^{つばね}朱の綴帯を締めていた。これがたまらなく上品で似合っていた。

麻佐子が、叔父さまは引受けましたと言うと、信雄は怒りだした。ばかにするなど云うのである。だが、汽車が動きだすと、叔父の眼は妻にいつまでも流れていた。

叔父さまは叔母さまが心から好きなのだと思った。麻佐子には、この情景が幸福な思い出として残っている。

一ノ関駅に着いたのは朝の六時という早さだった。駅前の宿で休み、それから車を備って平泉に向った。あいにくと空が曇り、うす暗い景色だった。

「恰度いい。芭蕉もこんな時期だったのだろう」

信雄は車の中から空を見上げた。

金色堂では高い石段を信雄はわりと平気で登った。杉並木が印象的で、その根かたに一度だけ彼は休んだ。

「叔父さま、麻佐子と二人づれではつまらないでしょ？」

「明るい擲^{から}擲^かいだだったが、やはり隆子のいないことは叔父には寂しいに違いなかった。

「それでもないよ」

信雄は眼尻に微笑の皺をみせ、根から腰をあげた。持っている杖は、石段にかかる前に土産物屋で買求めた。

山鳥が杉の葉の間から飛び出して行った。

途中の、弁慶堂という小さな建物の前で寺僧に出遇った。叔父はものを訊いていた。親切な坊さんで、わざわざ上まで案内してくれた。麻佐子は、携えてきた文庫本の『おくのほそ道』を小休止のたびにのぞく。

「兼ねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散りうせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に類廃空虚の叢と成るべきを、四面新に囲みて、薨を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂」

信雄と麻佐子は金色堂に入って、その内陣の仏像や、

螺鈿^{らでん}細工などを眺めた。だが、藤原三代の栄華を放った金色は見られず、歴史の重みが、剥げた仏像の黒漆や、内陣の格天井、円柱、長押の剝落した絵の具の跡に落ちかかっていた。

「さあ、これからいよいよ山形越えだね」

弁慶の墓、無量光院跡、観自在王院跡などの標示板や毛越寺のある丘を下りて、車に乗った信雄は云った。

「山形へ直行するんですか？」

「そんな顔つきをしなくてもいい。せつかく『おくのほそ道』を辿るのだ。ゆっくりと歩こう」

「芭蕉は尾花沢というところで紅花^{べいばな}でつくる紅の製造元に泊っていますわね」

「うむ。きみは試験勉強してきた甲斐があるね。あそこには鈴木八右衛門といって紅花を売買する豪商がいた。これが清風といって俳人だね。芭蕉はそこを頼って行き、句会を催してもらっている」

「そんな豪商なんかはどうでもいいわ。わたくし、その紅花というのにとっても惹かれるの。辞典で調べてきたんですけれど、花が咲くのはもう少し先なんですって」

「昔は、その花から口紅などの顔料を取ったものだ。」

まゆはき（眉掃き）を俤おもかげにして紅粉べにの花

芭蕉の句だ。今ではすっかり化学製品に押されて駄目になってるらしいがね」

「でも、見たいわ。どんな植物だか。紅花なんてとてもロマンチックなんですよ」

「あるかどうか。まあ、標本程度には作ってるのかもしれない」

山が近く、古い農家の集落をときどき過ぎた。

「芭蕉は、この道を歩いたんでしょうか」

「昔の旧道と、今の新道とはもちろん違うので、なんとも云えない。なあ、運転手さん、どうだい？」

信雄は上機嫌でそんなことを訊いたりした。

「じゃ、叔父さま、今夜、その尾花沢に泊るんですか？」

「尾花沢には、適当な旅館はないだろう」

「じゃ、やっぱり山形なの？ わたくし、地図で見たら、その近くに天童温泉というのがあったから、そこになさるかと思ったわ」

「いま云ったばかりじゃないか。われわれは『おくのほそ道』を辿ろうとしている。ほら、芭蕉は光堂から一ノ

関に戻って、どういうふうに歩いたね？」

麻佐子は文庫本の活字に見入った。中尊寺に詣った芭蕉は、盛岡街道を引返し、岩手の里に一泊し、翌日は小黒崎、みづの小島などというところを過ぎ、鳴子なるこの湯より尿前いりまへの関にかかって出羽の国に越えようとした。ところが、この道は旅人も稀なところだったので関守に怪しまれ、やっとのことで関越えをした。そこを通ったときは日がすでに昏れていたもので、関守の家を見かけて宿を借りた。折悪しく風雨となり、仕方なく山中のその家に逗留した。

ここで芭蕉は「蚤虱馬の尿する枕もと」の句をものしている。

「今夜は、その鳴子温泉に泊るよ」

叔父は云った。

「でも、なんだか中途はんぱなようですわ」

時計は三時近くになっている。

「まあ、ゆっくりと行こう。二泊三日がわれわれの予定だからね」

信雄が云ったのは、芭蕉の旅どおりに酒田に出て越後路へ入るのはとても無理だったからである。麻佐子の飛

び石連休という制限もあったが、一つは信雄自身の健康のせいであつた。

鳴子温泉は荒雄川に沿つた坂道に町が出来ている。

さすがは湯の里で家のうしろから白い煙が上つていたりした。入つた旅館は陸羽荘というのだった。駅は道より低く、宿は道より高かつた。

麻佐子が風呂から出ると、先に浴びた叔父は宿の浴衣一つで縁側の籐椅子にかけていた。

「あいにくの天気だな」

まだ霽はれない空を見ている信雄は麻佐子を見返つた。

そのとき麻佐子に向けた叔父の眼は、ちよつと異様なものを見たように光つた。その視線の意味がその場では分らなかつた。

「だが、幸運かもしれないな」

信雄は顔をもとに戻して云つた。

「あら、お天気が悪くて仕合わせなんですの？」

麻佐子は手摺に手拭をかけた。

「うむ」

信雄は、その癖になつてゐる片方の眼をすばめるようにし、指先に煙草を挟んでいた。

「芭蕉と、隨行の曾良そらとが歩いたときもやつぱり、こんな天気だったんだろう。山越えするときに風雨に遇つてゐるからね」

「そうでしたわ。なんですか、そこで変な句を作つてゐるわね」

「若い女性には不潔とみえるな」

叔父は笑つた。

「蚤、虱に悩まされながら、馬の尿が枕もとに聞える場所に寝かされたんだ。だが、この句ほど当時の百姓家を表現してゐるものはないね」

「少々リアルだわ」

「リアルの中に詩がある」

彼は麻佐子の言葉を訂正した。

「旅人の哀しきかしら」

「昔の俳諧師はみんなそうだったのだ」

信雄は自分の意見を下した。

「芭蕉はまだいいほうさ。とにかく江戸では名が通つてゐたし、地方から江戸に来る人の口伝えもあつて、その名は地方在住の俳人に知られてゐたに違ひないからね。それに弟子もいた。だが、ほかの俳諧師の旅となると、

ほとんど乞食同然さ。自作の句を短冊に書き、それを扇子に載せて土地の俳人の門口に立ったものだ」

「へえ、そんなことをしたんですか」

「それでいくらかの金を貰ったり、あわよくば宿を借りたりしたのさ。だが、そんな甘いことはいつまでもつづかない。江戸を食いつめた俳人たちが旅にだんだん多く出るようになったからね。そういう旅俳諧師は門前払いを喰って苦勞したにちがいないさ」

「さすがに芭蕉はどの土地でも歓待されていますわね」

「ところが、そうでもないよ。ほら、さっき紅花の話が出たね」

「ええ。……明日、その紅花が見られるかもしれないと思うと、うれしくなっちゃうわ」

「現代の娘は」

と、叔父はしかつめらしい顔をした。

「そんな夢を持っているが、昔は、その紅花で尾花沢の鈴木清風が産を成した。ところが、芭蕉はその鈴木家に泊ってはいけるけれど、冷淡な仕打ちを受けている」

「あら、それは違うわ。わたし、大急ぎで本で勉強してきたんだけど、ずいぶん歓待されてるじゃないの」

「表向きはね。だが、俳諧師の最上の待遇は、その土地で句会を開くことだ。当時の言葉で云えば、彼を主賓に俳諧を巻くことだね。鈴木という問屋さんの旦那は、たしかに芭蕉のために句会も開いている。また手厚いものなしもしている。芭蕉は、その『おくのほそ道』に感謝の言葉を書いているし、そう曾良も随行日記に記している。だが、芭蕉が泊ったのは紅花と養蚕の収穫期で、鈴木清風は一度も句会に姿を出していない」

「あら、そうだったかしら」

「そらみろ、まだ勉強が足りないな。当主の清風は芭蕉の附き合いに、自分のところで居候のようにして抱えていた素英という男を身代りに出しているだけだ。これは芭蕉にとって屈辱だったに違いない。芭蕉のあの感謝の文章は、取りようによっては清風に対する皮肉かもしれない」

「叔父さまの説が本当だとすると、紅花のご主人もずいぶんひどいことをしたもののね」

「それが当り前なのさ。実業家というものは非情に出来ている」

この言葉が麻佐子に妙に残っている。それは紅花とい